

4. 取組の効果把握と評価

前章に示した施策を効果的に展開するためには、各施策による効果を的確に把握するための指標を定め、施策へのフィードバックなど適切な改善策を講じながら取り組んでいくことが重要である。再生計画（第二期）では、取組の基本方向について 17 項目の指標を定め、その推移状況を整理した（次ページ以降参照）。

本計画で掲げる施策の評価については、水質改善や生物多様性の保全への寄与度など、東京湾というマクロなスケールでは直接の効果が読み取りづらいものや、短期間では効果が発現しづらい性質のものなど、適切な評価を行うためには、長期のモニタリングや複数の指標を用いた評価を行うことが求められる場合がある。

一方で、啓発イベントの開催状況や、親水施設などハード施設の整備状況など、比較的容易に数値として集計し評価することが可能な取組もあるが、啓発活動等による市民の意識向上や環境保全活動への参加意欲の高まりなど、目に見える指標として把握することが一概には難しい取組もある。

加えて、指標については施策の遂行による成果を効果的に PR できるよう、対外的に分かり易く、かつインパクトがあるものとすることも望まれる。

評価指標の設定にあたっては、上記のような、各施策の特徴や課題を踏まえて、より適切な指標の設定を行い、施策の展開に役立てて行く必要がある

「行動計画（第三期）」においては、令和 5 年 12 月に東京湾再生官民連携フォーラムからの政策提言がなされ、底層溶存酸素量、透明度、全窒素・全りん、赤潮発生回数、底生生物から見た環境保全度評価、下水道対策による負荷量の削減量、水遊び・環境学習イベントの開催数・参加者数及び開催場所数の 7 つの指標が提案されている。

本計画に掲げる施策を効果的に推進するため、従来、設定・活用してきた指標について十分な検証を行うとともに、フォーラムが提案する指標との連携も視野に、有識者等の意見を聴取したうえで、以下に示す 5 つの実施方針について、新たな指標を設定し取組を進めて行くこととする。

◆ 5 つの実施方針

- （1）連携・協働の取組
- （2）水質改善の取組
- （3）生物生息環境改善の取組
- （4）クリーンアップの取組
- （5）モニタリング・情報発信の取組

表 4-1 「再生計画（第二期）の指標（1. 人と海のつながりの再生・創出）」の一覧

番号	指標	定義
①	人が海にふれあう親水空間の拠点数及び水際線延長	東京湾内 6 港における親水護岸の設置総数
		東京湾内 6 港における水辺に接する護岸と公園の延長
②	海辺を臨む公園・緑地の面積及び利用者数	東京湾内 6 港における緑地の面積の総計
		東京湾内の海浜公園等の施設利用者数
③	パブリックアクセス延長	パブリックアクセス延長 (東京湾内 6 港における水辺に接する護岸と公園の延長)
④	環境関連の NPO 数等	東京湾に関係する NPO の登録総数
		東京湾再生官民連携フォーラム事務局の登録会員数
		東京湾大感謝祭の来場者数
⑤	参加型環境学習の取組件数	東京湾及びその流域における参加型の環境学習等の取組件数
⑥	参加型クリーンアップ・イベント数等	東京湾及びその流域における参加型の清掃活動等の取組件数
		東京湾 6 港及び一般海域の海面清掃による回収されたゴミの量

●推移の概要

NPO の登録総数とフォーラム登録会員数は順調に増加し、親水空間の拠点数や水際線延長、海辺を臨む公園・緑地の面積は若干ではあるものの増加した。

施設利用者数や大感謝祭参加者数は、コロナ禍の影響もあり一時的に大きく減少した。その後、施設利用者数はコロナ禍以前と同程度にまで回復した。大感謝祭の参加者数は、会場変更の影響もあり、以前の賑わいまでは回復していない。

環境学習の取組件数は減少したもののクリーンアップ・イベント数は増加傾向にある。また、回収されたゴミの量は減少傾向であった。

表 4-2 「再生計画（第二期）の指標（2. 良好な水環境の再生・創出）」の一覧

番号	指標	定義
⑦	COD, T-N・T-P 環境基準の達成率	COD, T-N・T-P 環境基準の達成率
⑧	夏季の東京湾奥部の透明度	東京湾の陸に近い海域における公共用水域水質測定結果の夏季平均値
⑨	夏季の底層 DO（溶存酸素）濃度	東京湾の陸に近い海域における公共用水域水質測定結果の夏季平均値
⑩	赤潮・青潮の年間発生回数	過去 5 年間の発生回数の平均値
⑪	環境情報の収集と公表等	東京湾環境情報センターのウェブサイトへの年間アクセス総数
⑫	東京湾流域下水道の高度処理人口普及率	東京湾流域下水道の高度処理人口普及率
●推移の概要 COD、T-N, T-P について、それぞれ横ばいの傾向ではあるものの、T-N, T-P は環境基準を満足している。透明度と赤潮・青潮も横ばいの傾向であったが、底層溶存酸素に関しては、減少傾向にある。 高所処理人口普及率は、大きく増加した。 東京湾環境情報センターのアクセス数は、年によりばらつきが大きい。令和 2 年以降は増加している。		

表 4-3 「再生計画（第二期）の指標（3. 多様な生物生息環境の再生・創出）」の一覧

番号	指標	定義
⑬	生態系ネットワーク拠点数	新たな浅場、干潟造成に伴いアサリ、アマモ等の生息場が定着した地点
⑭	干潟・藻場・浅場等の面積	干潟・藻場・浅場等の面積
⑨	夏季の底層 DO（溶存酸素）濃度	生物生息場の面積（干潟、浅場、砂質海浜、塩性湿地、磯場、磯浜）
⑮	底生生物の出現種数及び生息環境	底生生物の出現種数
⑪	環境情報の収集と公表等	底生生物の生息環境
⑯	海面漁業の漁獲量	東京湾内（千葉県、東京都、神奈川県）における海面漁業の漁獲量
⑰	生物生息環境配慮型構造物の施設延長	東京湾内 6 港における環境配慮型構造の港湾施設の施設延長
●推移の概要 新たな干潟、浅場や生物生息環境配慮型構造物等が整備されつつあり、生物生息場は若干の増加傾向である。ただし、これまでみられていた生物生息場の近年の状況は把握できていない。 底生生物の出現種数や生息環境は、底層溶存酸素に改善が見られないこともあり、横ばいの傾向で推移している。 漁獲量に関しては詳細な統計調査が終了しており、最近の状況は不明である。		

あとがき

東京湾の未来には、どんな風が吹いているのでしょうか？

未来の東京湾は、どんな表情を見せてくれるのでしょうか？

東京湾の「いま」を見つめて、東京湾の「みらい」をつくっていくために何ができるのかを考えてみました。

未来の東京湾が私たちを笑顔にしてくれる存在であるよう、みなさんと一緒に歩みを進めて行きたいと思います。

最後に、本計画の作成にあたりご助言ご指導をいただきました、東京大学大学院新領域創成科学研究科 佐々木淳教授、国土技術政策総合研究所 港湾・沿岸海洋研究部 海洋環境・危機管理研究室 岡田知也室長、一般財団法人 漁港漁場漁村総合研究所 竹山佳奈主任研究員に厚く感謝申し上げます。

令和7年3月
関東地方整備局

【本計画に関する問い合わせ先】

関東地方整備局

企画部 企画課

電話：048-600-1329

港湾空港部 事業継続計画官付

電話：045-211-7404